

幼児の身体表現活動におけるオノマトペが引き起こすイメージと動き—幼児それぞれのイメージに着目して—

村瀬瑠美 (千葉敬愛短期大学)
寺山由美 (筑波大学)

1. 研究背景と目的

幼児期の身体表現では、イメージと動きの関係は看過することができず、幼児のイメージと動きをつなげ、相互作用を促して身体表現を導く際に、保育者の発する言葉の影響力は大きい。保育者が幼児にかける言葉で、イメージと動きをつなげ、幼児の表現を引き出すような言葉であると捉えられているのはオノマトペであろう。幼児の身体表現とオノマトペに関するこれまでの先行研究は、幼児個人に焦点を当てて、想起されるイメージやあらわれた動きを詳細に検討したものはない。そこで、本研究ではオノマトペが幼児に想起させるイメージと動きについて、幼児個人のイメージと動きに焦点を当てて、実験と観察という手法を用いて明らかにすることを目的とする。

2. 方法

本研究は、5歳児(年長児:5,6歳)16名(男子5名,女子11名)への実験と観察によって明らかにされた。実験者、観察者は共に筆者であった。

1) 実験方法の概要

実験は対一の面接形式で行われ、1人の対象者に対して10分前後で行われ、6つのオノマトペ(表1)に対する反応をビデオによって映像記録された。6つのオノマトペは村瀬・寺山(2018)の先行研究「幼児の身体表現活動中に使用されるオノマトペの分類」から、異なるカテゴリのものを一つずつ選んだ。実験は個室で一人ずつ行われ、実験前後の会話や幼児の様子も記録した。

表1. 選定された6つのオノマトペ

順番	オノマトペ
1	くるくる
2	ぴょんぴょん
3	ブーン
4	ざあざあ
5	キラキラ
6	ブンブン

2) 観察方法の概要

観察は①「実験室に入るまで」、②「実験室に入室してから実験が始まるまで」、③「実験中の実験に関係のない場面」、④「実験終了後から実験室を出るまで」、⑤「実験室を出てから」の5つの場面に対して行った。

3) 分析方法

対象者16名の映像記録と観察の記述から得られたデータは、すべてテキスト化され、対象者ごとに概要表にまとめられた。分析方法は村瀬・寺山(2017)を参考にした。

3. 結果と考察

本研究は、16名の対象者のオノマトペへの反応それぞれに対して考察を行い、対象者ごとの結果と考察から総合考察を行った。ここでは、紙面の関係上、総合考察のみ記載する。

対象者ごとに得られた結果と考察から、以下の2点が考えられた。

1) オノマトペから動きまでのパターン

幼児がオノマトペを聞いてから動きにあらわれる際には、以下の4つのパターンがあると考えられた(表2)。

- ①イメージが言語化でき、動くことができる
- ②イメージが言語化できないが動くことができる
- ③イメージは言語化できるが動くことができない
- ④イメージがない、または言語化できず動けない

表2. 幼児がオノマトペを聞いてから動きにあらわれる際のパターン

イメージ 動き	言語化できる	言語化できない
あらわせる	パターン①	パターン②
あらわせない	パターン③	パターン④

2) オノマトペが引き起こすイメージと動き(自分)

幼児がオノマトペから想起したイメージとあらわれた動きの関係について、<自分>の意識に着目すると、以下の3つの関係が考えられた。

- ①<自分>の運動のイメージと<自分>の動き
- ②<自分>でないもののイメージと<自分>の動き
- ③<自分>でないもののイメージと<自分>でないものの動き

引用参考文献

- 村瀬瑠美・寺山由美(2017) 他者作品を踊る際の踊り手による作品イメージ現実化の取り組み—振付の動きの習得との関係性に着目して—。舞踊教育学研究, 19:3-14.
- 村瀬瑠美・寺山由美(2018) 幼児期の身体表現活動における保育者の用いるオノマトペ—身体表現活動におけるイメージに着目した分類—。スポーツ運動学研究, 31:65-78.